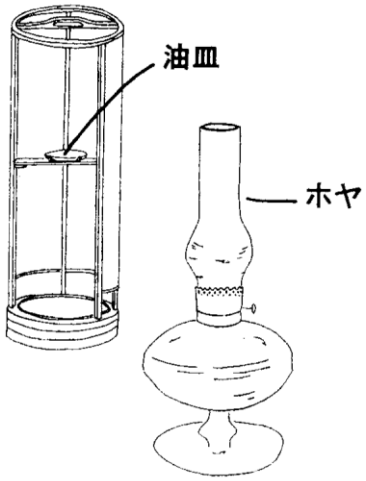
生活用具が語る知多の近代

明治になって新しい時代を迎えると、洋風化の波が徐々にこの地域にも押し寄せた。夜の闇をより明るく照らし出すランプは、正に時代の象徴であった。生活様式の変化に伴い、様々な生活用具が出現した。新しい道具が広まる一方で、昔ながらの道具も修理や手入れを繰り返して大切に使用された。

昭和の大戦後には電気・ガス・水道の普及とともに、生活用具は更に便利で安全な庶民的なものへと姿を変えていった。



●あんどん

油皿に入れた油を燈芯にしみこませ、火をともした。当初は、油と燈芯であったが、後にろうそくが使われるようになり、電気スタンドへと変わっていった。

●台ランプ

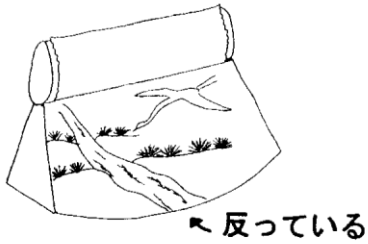
風よけのためにガラス製のホヤをかぶせた。明かりをともすために石油を使ったので、ホヤにすすが付いた。すすの付いたホヤの掃除は、子どもの仕事であった。

●カンテラ

鉄・銅などの金属でできている。小さく持ち運びに便利だったので、家庭ではもちろん、外出する時にも使われた。

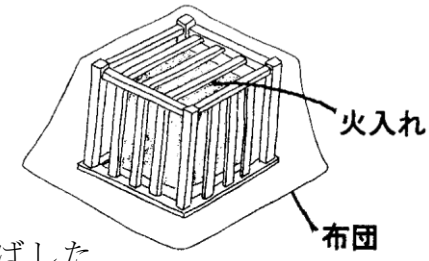
●幻灯機

ランプの光を使って、ガラスに描かれた写し絵を暗い室内の壁に映し出した。



●箱枕

結い上げた髪型が崩れないように高さがあり、寝返りをうつ時に楽なように底が反りかえっている。嫁入道具の１つ。一度も使用されず、大切にしまってあったもので、漆塗りの台に鶴と松が描かれている。



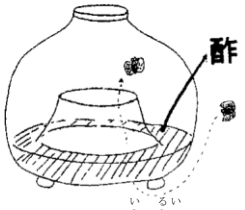
●やぐらこたつ

木製で、中の土製火入れに炭火を入れた。上から布団をかぶせ、冬に暖房器具として使った。

●火のし

金属製のお碗の中に炭火を入れ、その熱で衣類の皺をのばした。

●ハエ取器

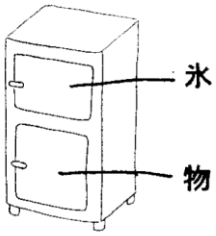


ガラス器の中に酢を入れ、蝿をおびき寄せた。ガラス器の中に入った蝿は、なかなか外に出ることができなかった。

●柳行李

柳の枝の皮を用いて編んだもので、軽く、丈夫で風通しがよかった。衣類をしまったり、運搬するのに適していた。

●冷蔵庫

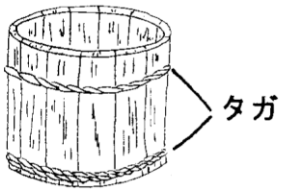


上の段に氷を入れ、下の段に物を入れて冷やした。市内の商店で、大正から昭和初期にかけて使われていた。

●おひつ

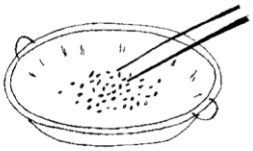
炊きあがったご飯を釜から移し、保存した。冬になるとワラで作ったゆさに入れて、ご飯を冷めにくくした。

●かし桶



米を研ぐ時に使用した。この地域では、「米を研ぐ」ことを「米をかす」と言ったので、カシオケと呼んだ。サワラ材に竹のタガをはめて作った。何回もタガを直して使用した。

●焙烙



火にかけて、ゴマ・豆などを炒るのに用いた。土製と金属製の両方があった。

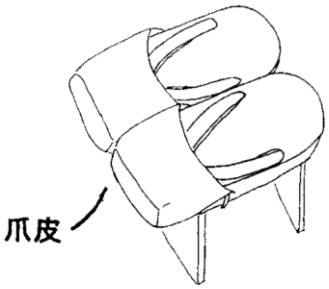
●防空頭巾

元々は防寒用であったが、戦時中は、空襲などから身を守るために使われた。衝撃を和らげるために綿を入れた。また、身元が分かるように住所、名前などを書いた白い布を縫い付けた。

●ポックリ

娘のよそいき用の下駄で、晴れ着を着る時に履いた。赤い鼻緒、金の糸の縫い取り、鶴や松の模様など、華やかに装飾されている。

●高下駄



よそいき用の下駄で、雨や雪の日には、つま先の方に水よけやどろよけ用の爪皮をつけて履いた。

●わら草履

普段履きの履物。ワラを編んで作った。補強のため、かかと部分に木綿が編みこんである。